

創価大学の創立と創価教育*

神 立 孝 一

1. はじめに

「創価大学の創立と創価教育」という話になると、やはり池田先生をはじめとして、戸田先生、牧口先生の話になります。毎回、申し上げていることですが、研究となると特に池田先生の呼び方が難しくなるんですね。創立者というと、創価大学の関係者だけの創立者になってしまいますし、非常に視野が狭くなってしまうといえますか、先生の扱いが狭くなってくる。名誉会長と言うと、これまた創価学会の最高リーダー、指導者という形になってしまいます。全世界的にひとつの学問の体系としてとらえる時にどうするのかというと、呼び方で敬称をつけなくなるのが普通だと思います。例えば、福沢諭吉であれば、慶応の方々は先生といいますが、我々は福沢と言います。ですから研究の時には本来、牧口、戸田、池田という固有名詞として使うことになります。ひとつの研究対象としてはこうなりますが、私の良心が痛みます。感情的には、どうしても先生とつけて呼びたくなってしまいますが、学問的に興奮してきて話をしますと、皆さんのお耳に差し支えがあるような、おまえ何様のつもりだと言われるような、呼び方があるかも知れません。お耳障りになるかと思いますが、その点だけご了承ください。あくまで学問的に創立者をどう扱うのかということです。

さて、今回のテーマについて、いろいろと考えたのですが、私の問題意識は、「創価大学は何故作られたのか？」というところにあります。創価大学を作ろうと言い、その創立を決めた発端は牧口先生であり、それを引き継いだのが戸田先生、池田先生です。そして池田先生によって、創価大学は1971年に創立されました。

その意志が継承されたと簡単にいいますが、その意志の継承というのは、それぞれ同じ問題意識、どうしても大学を作らなくてはならない、との思いがないかぎり、受け継がれるものではないと、普通は考えられる。なぜ作らなければならないのか。また、何故1971年に作られたのか。それについて考えてみたいと思うんです。ただ、ここで注意していただきたいのは、ここで述べる私の意見は、正しいわけではない、ということです。あくまでも、現段階で集められた資料に基づく私見です。

Koichi Kandachi（創価大学経済学部教授／所長）

*本稿は、2007年8月24日に開催された「夏季大学講座」の原稿を大幅に加筆訂正したものである。

今、大学が置かれている状況、とくに私立大学は非常に厳しい状況です。少子化の流れがあり、国立大学が独立行政法人化してきている。大学はこれまでとは全く別の環境におかれています。そのためでしょうか、私立大学は、自らが何を教育するのか、何を目指しているのかを明確にして、それぞれの個性を打ち出す時代になってきています。その意味からしますと、創価大学にとって一番いい形になってきたともいえます。各大学でもそれぞれの創立者の研究が様々な形で進められています。授業の中で自学史、これは自分の大学の歴史という意味ですが、それを学ぶようになってきています。自分の大学の歴史をそれぞれその大学に所属している学生が学び、いたい、自分達の大学は何を目指し、学生をどう育てようとしているのかを求めるようになってきています。創価大学でもそういう講座をいくつか開講しています。大学の首脳が話をしているものなのですが、今日はそのあたりのことを皆さんにご紹介させていただきつつ、自学史の一環としてこのテーマを選びました。そのため、創価学会の話や宗教の話も出て参りますが、それは創価大学ということの意味の上から考えて外せない。そういう観点でお聞きいただければと思います。

2. 創価教育の源流

(1) 牧口常三郎先生の大志

牧口先生は、1871年、明治4年の生まれです。6月6日にお生まれになったわけですが、実際にはこの年はまだ旧暦で、現在私たちが使っている新暦、いわゆる太陽暦、グレゴリオ暦ともいいますが、これに直すと7月23日になります。創価大学の創立が1971年のため、牧口先生生誕100年目に創価大学ができたわけですね。牧口先生は新潟の荒浜で生まれました。現在の地名でいいますと、新潟県柏崎市荒浜になります。新潟県中越沖地震で、最も被害が大きかったところです。

牧口先生が通い卒業されたのが荒浜小学校ですが、ここの小学校跡（現在の荒浜小学校は移転されました）に一つの碑が立っていました。牧口先生が碑文を書かれているものなのですが、かなり大きい石でできたものです。その碑も倒れたそうなんです。自然災害が起きますと、資料がなくなっていくという、非常に典型的な事例です。どうも修復はかなり難しいということだそうで、悲しむべきことです。

さて、牧口先生は北海道に渡られる。牧口先生にまつわる様々な文章や本がありますが、なかでも一番影響力があるのはマンガではないでしょうか。学生諸君のなかで、牧口先生の生涯を、マンガから知ったという人はけっこう多いですね。ですが、誤解を生みやすいのも、またマンガということもいえると思います。画像からはいるわけですから。特に牧口先生の少年時代のコスチュームなどが、ある程度固定化されたイメージとなって残ってしまいます。様々な出来事も、事実確認ができていないにもかかわらず物語として語られる。一つのストーリーとしては完結するのですが、研究という視点からすると、やや危ない。ここの点は、やはりきちんとたて分ける必要があるのではないかと思います。

さて、牧口先生は14歳で北海道に渡られたとなっておりますが、その確認は取れていません。いつなのか、何歳の頃なのかについては、確たる証拠がありません。小樽に渡って、最終的には

北海道尋常師範学校に入学されます。現在の北海道教育大学です。入学したことは分かっているのですが、入学までに何をしていたかはわかっていません。警察署で給仕として働いていたという話がのこっていますが、事実かどうかはわかっていません。

牧口先生は、北海道尋常師範学校に第一種生として入学します。これは入学試験がなく、警察署長や郡長からの推薦が必要なんですね。それがないと入れない。その関係でおそらく、給仕として働いていたのではないかと推測したのではないのでしょうか。しかし、あくまでも推測であって、事実かどうかは確定できません。第一種生というのは、学費も生活費も免除されます。優秀な教員を作るのが当時の明治政府の方針であった。したがって尋常師範学校の学生は、全員学費が免除されました。ただし、卒業したら教員にならなければならない、という条件がついたのです。牧口先生は明治22（1899）年、18歳で入学し、26年22歳の時、卒業生12名のうち3番の成績で卒業しました。そしてそのまま付属の小学校の教員になり、訓導として教鞭をとったのです。この時期、先生は『北海道教育新報』、これは北海道の先生方が色々な授業や教育法を学ぶための研究を載せる教員対象の雑誌ですが、そこに「単級教授法講義」という論文を書いています。これは約5年間にわたり連載されました。「単級教授法」の中身というのは、次のようなものです。当時は小学生の人数は少ない。そのため、小学校1年生から6年生に同じ教室で授業していた。これをどうすればいいのか、ということの研究されたのです。最終的には、単級は子どものためにならないという結論にいたっています。

明治29（1896）年に25歳で、結婚されます。牧口クマさんという方で、お父さんが熊太郎とおっしゃいました。このお父さんは、日蓮宗の信者でした。ですが牧口先生はこの段階では、全く関係がないようです。その後、東京に上京されます。32歳のときでした。明治36（1903）年に『人生地理学』を発刊。その段階ぐらいいろんな地理学の研究を深めていきますが、教育学の研究も続けられています。そんな中で、いろいろな人との出会いや、体を壊されたりしながら、ずっと教鞭をとっていかれる。大正2（1913）年42歳のときに、東京市の東盛尋常小学校の校長に就任されます。その後ずっと校長職を勤められました。なかでも大正10年以降、白金小学校での校長が長く、その頃の「校長日誌」が残っています。これは現在でも白金小学校に保管されています。その事実は確認されていますが、まだ詳しい調査分析にまでは至っていません。

昭和3（1928）年、三谷素啓という日蓮大聖人の研究者と色々な形で議論をし、その結果、法華経が非常に重要だと確信されて、法華経に帰依することを決められました。この前の段階で、自分の教育がいかにあるべきか、悩んで、苦しんで、考えて、いろんなことをやっています。もちろん教育の研究もしていますが、その根底であるところの教員がいかにあるべきか、ということに思いが至り、そのために、宗教はどうしても必要なんじゃないか、宗教的な信念は必要なのではないかと、いろいろな宗教を勉強された。キリスト教や神道、なかでも力をいれたのが、禊^{みそぎ}でした。滝に打たれて自分の穢れを流す。修行して、自分を鍛えるというものです。ですが、最終的に日蓮大聖人の仏法に出会った。科学的にみても、どういろいろと考えてみても、全部あてはまっていた。これほど合理性が高い宗教はないんだ、と牧口先生はおっしゃられている。それでこの信仰に入られたんですね。大聖人・法華経を中心とした教育、教員・教師、こういうもの

に牧口先生は行き着き、その信仰に基づいた教育法というのを繰り広げていくことになります。戸田先生もその段階で牧口先生について、法華経に帰依しました。

昭和5（1930）年11月18日、59歳のとき、戸田先生と共に「創価教育学会」を発足。この年『創価教育学体系』を発刊されたということは、皆様よくご存知のことと思います。牧口先生は、「創価教育学会」の活動を通じて、様々な教育論を展開していかれました。最終的には昭和7年、61歳になられ、麻布新堀尋常小学校校長を退職し、現場から離れます。若手の教員と共に自らの理論である創価教育学説、これを中心とした学習会を続けていく。そういう研究会としての創価教育学会、これが続いていくことになりました。しかし、創価教育学会の根底には宗教の活動がありますので、宗教の活動と共に教員のグループとして教育学を勉強する。これが昭和初期段階の牧口先生の活動でした。

最終的に、昭和18（1943）年、下田で不敬罪・治安維持法違反容疑で逮捕されます。そして牢獄に入れられ、昭和19年11月18日に、73歳で亡くなりました。

ところで、小熊英二という社会学者がおります。この人が『民主と愛国』という本で興味深いことを書いています。この書物は、戦前から戦後にかけて、「民主」「愛国」という言葉の使い方がどう変わったのかがテーマなのです。その中で、教育者のありようについて述べているところがあるんです。僕達は、牧口先生が「創価教育学会」の活動を進める中で逮捕されたことを知っています。何故、捕まったのかといえば、国家権力の弾圧によるものだ、というふうに耳で聞き、理解してまいりました。しかし、実態としてどういうものだったか、ということはどうも理解できない。歴史はすでに過ぎ去っており、現代になっていますね。そこで現代の我々の感覚で戦前を見てしまうと、推測や想像が入ってくる。歴史の研究はそこが難しいんですね。実は、そのときに生きていた人たちがどういう感覚であったのか、ということをもっと知っていくべきではないでしょうか。その上で、牧口先生の逮捕されたことの意味を問い返す必要があるのではないのでしょうか。この点を小熊英二氏が描いておりました。

当時、国家が戦争に向かって進んでいる、その時に、例えば学者、特に歴史学と教育学という国家の方向性に影響を与える学問をしていた人たちですが、この国家とどういったような付き合い方をしたのか、ということなんですね。何をどうしたのかを考えないといけない。小熊氏に言わせれば、教育学では、戦争に協力した者が歴史学より多く、戦中・戦後の連続性がより顕著だった。どういうことかといいますと、教育なので、子ども達に何を教えるかを決めるのは国家。国家がある方向性を決めた場合は、教員はそれに従わなければなりません。そうなったら、戦争を推進しようという方向に動かざるを得ない。こういうことになってくると、教育現場で校長先生が話をすることは何かといえば、男の子は天皇のため、国家のために命を投げ出し、死んでいくことが最も幸せな生き方なんだ、と言うしかないですね。ある意味で、「教育は本当に怖い」と創立者はいわれますが、教育で子ども達は変わる。その子ども達の現場にいたのは国家の代表者である教員でした。教育学の先生が自虐的に「自分達は所詮、国家の片棒担ぎ、宣伝マン」と言う方がいますが、それと同じで、戦前の場合には、国家が戦争に向かっていきますので、「戦争だ！」となっていた。当時は、戦争といわないんですね。当時の言い方、「大東亜の平和のために」ある

いは「東洋の平和のために日本は戦っている」という。心ある学者達は、昭和16年以降、「平和」という言葉を使わなくなる。牧口先生も使わなくなる。平和という言葉をつかうと、逆に戦争の推進になる。牧口先生は「平和」という言葉を使わないので、戦争の礼賛者・推進者だったんじゃないかという批判があるんですが、それは本当に当時のことを知らない人がいうことです。昭和15年・16年・17年あたりで、「平和」と叫んでいる人は、これは、国家の戦争の推進者なんです。僕達概念の「平和」というまでもなく戦争のない状況のことですね。しかし、当時の平和は、日本のやっている戦争が正しいこと、という裏づけのために使っている。ここが難しい。

さて、先にふれた小熊氏の論究に戻しましょう。それによれば、ある教育学者がいた。この人はむなかたまさや宗像誠也という、戦前では非常に高名な教育学者ですが、この方が自分の良心と戦いながら、最終的には国家の側についた。それは、教育者は生徒の模範であらねばならない、との意識からでした。したがって、教育学者、あるいは教員は当時の規範に従わなければならない。つまり、当時、示された正義とか基準というものに自らも従わなければならないし、子ども達も従わせなければならない。だから教育学者というのは、歴史学や哲学といった分野の研究者に比べて、戦争協力に巻き込まれる度合いは非常に高くなるわけです。歴史学者は国家が大事ということで、万世一系の天皇を中心とした、いわゆる「皇国史観」に巻き込まれていきます。哲学も同じ様な状況でした。しかし、教育者には現場があります。規範にどうやってあわせていくかが中心なので、教育学者というのは戦争に協力する、そういうようなところに巻き込まれやすい立場にあるわけです。これは分かりやすいことですね。従って、当時の教育学者が他の分野に比べて、かなりの度合いで戦争の協力を強いられたということが挙げられます。だからこそ、牧口先生がここでクローズアップされてくる。宗像誠也は、自分が戦争協力の論文を書いた理由の第一に、「牢屋に入れられるという恐怖」をあげています。教員ですから、人間としての模範であらねばならない。そういう自分が戦争に反対することによって、牢屋に入れられるということは、自分の全てを失うことになる。その恐怖感があった。これは、正直な告白といえるでしょう。それに対し、牧口先生は、自分の信念を貫き通す中で、逮捕された。逮捕された事実からすると、牧口先生は信念を貫かれた、ということが観念では分かります。しかし、当時の同じ教育学を研究している人たちの言葉、特に、牢屋に入れられるという恐怖、ということはどうでしょうか。宗像誠也は、自分が教育者だったから、教育者として、国家のそういう流れに従わざるを得なかった。当時の、良心的な教育者が、戦争の協力者にならなければならなかった。その状況を戦後になって振り返っているのです。

こう考えてきますと、牧口先生は自分の信念を強く持って、教育者としての、それから市民としてある種の恐怖を乗り越えて、逮捕されていった。それは非常に重要ではないかと思うんです。その意味で、今回のタイトルに「大志」をあげてみました。これが無い限り、創価教育はなかったし、創価大学は存在していない。牧口先生は、昭和14年に初めて、あるお寺で行われた、御講すなわち日蓮大聖人の御書の勉強会が終わった後、一言述べてくださいとのことで、「私は自らの教育理論を基にした大学をつくりたい。大学から小学校までつくりたいんだ」と発言をされた。ご家族である金子貞子さん、牧口先生の3男の洋三さんの奥様ですが、現場で聞かれたそうです。

牧口先生は、面白い方で貞子さんを洋三さんの奥さんを選んだわけですが、もともと貞子さんは、牧口先生の教え子なんです。6年生のとき、貞子さんが怪我をしていて、教室の窓から校庭で遊んでいる友達をみていたら、「貞ちゃん。元気？」と声をかけてくれたやさしい先生だったとのことです。洋三さんにはフィアンセがいたんですが、「洋三。君の奥さんは貞ちゃんだからね」といって、自ら貞子さんの実家へ行って、貞子さんをもらいたいと。実家の方では、まだ若くて何も知らないからお嫁には出せませんと答えた。すると、「良いんだ。全部私が教えるから」と。先日、学園が甲子園へ出たとき、創立者も洋三さんが甲子園に出場したことを紹介されていましたが、その洋三さんの奥さんが、今、ご紹介した貞子さんです。牧口先生の話は貞子さんからよくお聞きしました。例えば、洋三さんが夜中に熱を出して寝込む。貞子さんは心配して一階に降りて、頭を冷やすために台所へ行って、冷たい手ぬぐいを持って上がろうとすると、牧口先生から「貞子。何をやっているんだ」と。貞子さんは「実は主人が熱を出してまして」と答えたそうです。すると牧口先生は「何？つれて来い。おまえら何か謗法をおかしただろう。だから熱が出たんだ。今から題目をあげる」という調子で、本当に大変だった（笑）。信仰に厳格だったんですね（笑）。牧口先生の写真がいくつか残っていますが、いつでも牧口先生は苦虫をつぶしたような顔で写っておられる。笑った顔はほとんど無い（大笑）。洋三さんのところには洋子さんというお孫さんがおられますが、その洋子さんと一緒に写っている写真もありますが、やはり牧口先生は怖い顔をしている。洋子ちゃんも怖い顔で写っている（大笑）。それが牧口先生なんですね。

（2）戸田城聖先生の熱情

次に戸田先生にうつりましょう。

戸田先生は牧口先生が白金小学校に勤務されていた時に、自分で教育をやりたい、との事で補習学館という塾を作られる。これは、一種の創価教育の実験校のつもりであったといわれています。そうしたなかで、昭和5（1930）年11月に『創価教育学体系』を牧口先生が出されるんですが、同じ年の6月に、『推理式指導算術』を出版される。みなさん、戸田先生は算数の先生じゃないかと思われるかもしれませんが、実はその後に、『推理式指導読方』という国語の参考書も出されているんです。これも非常に売れた。その中身はどうかということについては、我々では研究分析できないということで、専門の先生に分析をして頂いたんですね。すると、その先生がおっしゃるには、自分で国語の参考書を出そうと思っていたが、指導読方を読んだら、書く気がなくなった。なぜならすごい参考書である。国語の中でこんなにヒントを子どもたちに分らせる構成になっている本はほとんどない、と評価されました。算数もものすごく力が伸びたといいますが、国語もものすごい力がついた、そういう参考書です。

出版といえば、『小学生日本』という雑誌も出されていました。この雑誌は昭和15年から17年にかけて、出版されていた学習雑誌です。36冊発行されているといわれていて、現存が確認できているのは24冊です。戦前の学習雑誌はなかなか手に入らないんですね。それが今年になって、高崎隆治先生という、戦前戦中のジャーナリズムの研究者ですが、お持ちになっていたその『小学生日本』11冊を譲ってくださったんです。本当にありがたかった。私どもの創価教育研究所の所

蔵が17冊になりました。おそらくこの『小学生日本』を日本で一番持っている研究機関になったのではないのでしょうか。今後の研究材料として本当に貴重なものです。この雑誌は、全て戸田先生が巻頭言を書かれています。巻頭言がどういう形になっているのか、どういうロジックが展開されているのか。戸田先生の教育に関する考え方の分析ができるんじゃないかと、今後の研究の進展を楽しみにしているところです。

さて、戸田先生は、明治33（1900）年2月11日に石川県で生まれました。しかしすぐに北海道へ渡ります。ご家族全員が引っ越されたのです。場所は北海道厚田村。今は、石狩市厚田になっていますが、そこの小学校に入学しました。正式名称は「厚田高等尋常小学校」といいます。本年の夏に、その現厚田小学校へ調査に行つて参りました。戸田先生が書かれた作文が残っているんじゃないかという期待からです。戸田先生は、高等科に進学され、勉学に励むなか、いくつかの作文を同人誌のようなものに発表されておられるのですが、それが残っていれば、是非とも読ませていただきたい。そういう期待のもと、訪問させていただきました。残念ながら、作文は見つかりませんでした。しかし小学校の沿革史の卒業者名簿に、きちんと「戸田甚一」の名前が記されておりまして、それだけでもちょっと興奮しました（笑）。

戸田先生は豪放磊落な方だという話が残っておりますが、様々お聞きした話のなかで、私が一番戸田先生らしいなと思うのは、次のような逸話です。本当にあったかどうかは確かめるすべがありませんが、何となく戸田先生を彷彿とさせるものです。夏の暑い日、らくだのシャツとステテコ姿で、戸田先生は時習学館の2階におられたそうです。団扇で煽きながら、暑さをしのいでいた。牧口先生は小学校から帰られる際に、時習学館の前を必ず通られるそうで、その際、声を掛けられる機会が多かったというのです。そこで事務の方が、いつも注意をしておられたそうですが、牧口先生の姿が見えると、かならず戸田先生に「牧口先生がこられますよ」と伝える。そうすると戸田先生は、あわてて服を着替え、牧口先生をお迎えされたというんですね（笑）。師弟の関係がうかがえるエピソードではないでしょうか。

牧口先生が伊豆の須崎で検挙されたとき、昭和18（1943）年7月6日ですが、下田署に連行され、翌日、下田署から東京の警視庁に移管されました。その同じ7月6日に、戸田先生は、白金台の自宅で逮捕されています。年齢は43歳でした。戸田先生は高輪署に留置されます。この時、創価教育学会の幹部20名余りが一斉に逮捕されました。一斉に逮捕されるということは、7月6日の午前中に、創価教育学会の関係者を逮捕するという計画ができていないと、同じ日に日本全国で同時に逮捕されることはありえない。軍部が執拗に創価教育学会の活動なり、関係者を追いかけていた。そういうことが、この事実から分かるわけですね。

戸田先生はその後、7月20日に警視庁の留置場に移送されます。独房生活が始まります。その中で、一回だけ牧口先生とすれ違ったそうで、その時、「お体だけは大事に」と声をかけた。その時が、戸田先生が牧口先生を見た最後になるわけです。

戸田先生はこの独房で、どういう生活をされていたのか。その一つの事例として、独房で詠まっていた和歌から推測してみましょう。戸田先生は、色々な方に手紙を出されていますが、その中のいくつかは、和歌が書かれていました。この年の12月に、日本正学館の社員に対して出され

たものです。社長として雑誌の行く末を心配されていましたが、次のような和歌を詠まれています。

「静けさに 生命みつめて くらしけり 独房住まいの 朝な夕なは」

独房で何もすることがない。ただ、自分は生命を見つめて生きている。そういう思いが読み取れますね。

翌昭和19（1944）年、44歳になられると、独房の中で1日1万遍の唱題を実践し、法華経を白文で読み始めます。その中で、色んな事を悟られた。5月に奥様に

「きょうもまた いかにくらん 独房に あさげすまして なすこともなし」

という歌を送られている。今日もどうやって暮らしていこうか。独房にいと、朝ごはんが済んでしまうと何もやることがない。そのようななかで、唱題と法華経の勉強をされていた。

時は移り、昭和20年45歳。3月23日に奥様のお父様に手紙を書かれる。その中に戸田先生の心境が現れています。「牧口先生ノトコロガ恋シイ様ナ気持チニ襲ワレガチデス」。この年の正月、牧口先生が亡くなられた事を聞かれたんですね。号泣したそうです。もともと涙もろい先生ですから。

昭和20年7月3日に出所されます。この時に戸田城外という名前を戸田城聖と改名されました。これは、独房の中で色々と考えられていたことだそうで、名前は7案くらいあったらしいんです。そのなかで「城聖」をえられました。7月3日に牢から出てこられて、まず何を始めたのかというと、「心影余滴・三観房一喜法師」という題名をつけたノートを書き始めます。この意味は考えなくてはならないことだと思いますが、このあたりは今後の課題です。その中にやはり和歌が残っています。獄中生活のなかで読まれたものが記されていますが、そのうちのいくつかを紹介しましょう。

「帰りたいさに 泣きわめきつつ 御仏に だだをこねつつ 年を送りぬ」

「あけぬれば 暮るるを願い 明けぬれば 暮るるを願う 独房の窓かな」

牢から出たいと思っていた。牢を出たらどうしようかとずいぶんと考えられていた様子がうかがえますね。そのなかで出会った法華経の白文を読んで、一つの宗教的な覚醒を得た。有名な話ですね。そして出所を待ちかねていたわけです。

今年（2007年）になって分かったことなんです、2月に南伊利ノイ大学へ行って参りました。そこにありますジョン・デューイ研究所と創価教育研究所が学術交流の協定を結ぼうじゃないかということになったからです。なんでジョン・デューイなのか。それは牧口先生がデューイをよく読まれていて、考え方も良く似ている。何が一番近しいかというと、教育というのは教室だけでやるものじゃない。いろんな作業、いろんな行動の中で分かってくるものだ。午前中だけ授業をうけ、午後からは実際の生活の活動をする。それが最も効果の上がる教育ではなからうか。こうした牧口先生の考えとデューイも同じなんですね。料理や大工、そういうことをやらせなければダメなんだ。要は子ども達が自ら考えて、自ら生み出す、この力を作り出すのが教育であるということです。「価値創造の教育」、そこが似ているんですね。そこで、両者を比較対照しつつ、研究を進めていこうということで、学術協定を結びました。さて、せっかく遠いアメリカまで出か

けるのだから、ついでに、といっちは何ですが、メリーランド大学にある「ブラング文庫」も調査をしてこよう、というのでワシントンにも足を伸ばしました。

この「ブラング文庫」というのは、昭和20（1945）年から22年にかけて、連合国軍最高司令官総司令部、いわゆるGHQですが、その情報局の中にいたブラングという人が、検閲のために日本で発行された雑誌・新聞・書籍を全部集めていたんです。それがまとめて、メリーランド大学の図書館に保存管理されています。そのおかげで、わたしたちは当時日本で発行されたものの全容を把握できることになりました。この資料群のことを「ブラング文庫」と称しているのですが、今さまざまなプロジェクトが進んでおり、研究分析がなされているところです。

さて、私達のねらいですが、戸田先生が出獄されてすぐに「通信教授」を始められたことが、小説『人間革命』に書かれています。終戦は8月15日。それから約一週間たった、23日の朝日新聞に、その広告を載せているんですね。その現物は研究所にもありますが、8月23日に広告を掲載できるということは、少なくとも前日か、前々日には原稿が出せるわけであって、広告を出すということは、その段階で教材ができている、またはできる見込みがないと出すことはできません。8月23日ということは、終戦直後ものすごく早い段階といえるでしょう。小説『人間革命』を読むと、どうも終戦日がいつになるのかということを、戸田先生は7月3日に入獄されてからずっとおっかけていた。いつ戦争が終わるのか、いろんな人に聞いていた。8月15日近辺に終戦がくるぞというのが分かったので、そこをめがけて教材を作ろう、広告を打とうとされていたことが十分推測できるわけですね。ここが戸田先生のすごいところです。高崎隆治先生がいわれるには、戦中から戦後にかけて、出版関係に関しては、戸田城聖の右にでるものはいない。出版会の王者である。こういう評価です。そこで、小説『人間革命』で紹介されている「通信教授」というものは、どういうものなのか。また、戸田先生はその教材以外には何か出版されたものはないのか。それが知りたかったのです。

ブラング文庫に行きました。こういうときは、本当にわくわくします（笑）。さて、調査をするとうったんですね、戸田先生が出版されたものが。まずは昭和20年の分です。20年に何を出したかということ、翌年の中学校の受験の参考書、問題集です。昭和21年度の中学校入試問題集を出している。現物の保存状態は非常に悪い。わら半紙にガリ刷りでした。さわるとパラパラと落ちてしまうようなものです。研究者の間で、歴史上、最も粗悪な紙といわれるものです。この存在はこれまでわかっていなかった。その他にも、社会とか理科とか、英語とかの問題集も出版されていました。一番典型的なのは、わら半紙の短い方の端の部分を紙のテープでとめているだけのものがあるんです。中はガリ刷りですから、日本史や日本の地理の問題などは、全部手書きです。例えば、源頼朝の顔や日本の地図も手書きです。頼朝などは、わたしたちが教科書で見るとは全く異なっており、ぜんぜん似てない（笑）。それでも無いよりましだったんでしょうね。売値は60銭。要するになんとか経営を立て直すんだというところから、戸田先生の一步は始まっている。戦前のやってきた事業を立て直して、創価教育をさらに進化させていこうと、そういうふうに見て取れます。この一点をとっても、アメリカでの調査の成果は大きかったといえると思います。

（3）池田大作先生の正義

戸田先生がこうして事業を始めていくわけですが、そんななかで、昭和22年8月24日がやって参ります。今日は不思議なことに、ちょうど池田先生の入信60周年という意義ある日です。こういう日に、夏季大学講座の担当ができるということは、私にとって本当に思い出の日になります。光栄なことだと思っております。ましてや三代の先生のこと、創価大学のことを皆様と共に考えられるのは、非常に感動的なことであると思っております。ありがとうございます（拍手）。

話を池田先生の人生に向けていくことにしましょう。

池田先生が戸田先生と出会って、その後、紆余曲折があった訳ですが、その点につきましては、最近も先生がことあるごとに書かれています。つい先日の8月20日付けの『聖教新聞』に「戦後の62周年に念う」という一文を発表されました。これは本当にビックリしました。これまで戦前のことをご自分の口から語られることは、非常に少なかったのです、ここまで先生は語られるんだな、と改めて思いました。赤裸々なお父様・お母様の言葉まで書かれています。これが先生の思想の原点・体験なんだということが分かりました。当時、池田先生は普通の少年だった。池田先生が今の池田先生になったのは、子どもの頃から特別な存在ではなかったということなんですね。戸田先生と出会って、ガラッと変わられた。いい表現がないんですが「化ける」というかガラッと変わります。一瞬にして「ドーン」と変わった。それまでは普通の少年として、戦前の教育を受けていますから、先生も戦争に行って、自分の命を天皇のために使っていくのが当たり前なんだ、という教育を受けています。だから先生も兵役を志願された。それを止めたのはお父様だったのですね。「家はもうたくさんだ。4人までとられている。5人目までもっていくのか」。そのお父様の怒りを見られ、池田先生は兵役志願を辞められた。そういった時の思いが凝縮されたものが、この「終戦62周年に念う」だと思います。

もうひとつ新しいことが分かってきた。池田家というのは大森海岸で、浅草海苔を作っている「海苔屋」さんだったのですが、その規模は小さくない。なぜ、それが分かるのかというと、先生は若い頃から沢山の本を読まれているという事実なんです。本があるから本を読める。では、その本はどこにあったのか。自宅である。自宅で相当本を持っていないとそれは実現できなかったでしょう。そこで、池田先生が生活をされていたご自宅というのは、どのようなお宅だったのかということが、ずっと気になっていたのですが、「終戦62周年に念う」の中で、「わが家は、もともと東京の蒲田区（現、大田区）糺谷3丁目の2階建ての屋敷に住んでいた。広い敷地には鯉や鮒が泳ぐ大きな池があり、楓や樺や桜、さらにイチジクやザクロも植えられていた」と紹介されています。かなり大きいお宅だから、あれだけ多くの本があったんだということが推測できますね。10代からプラトンを読んでいるんですね、池田先生は。早熟といえば早熟です。ですが、そうさせたのは読書という一点につきるような気がしております。

今日も図書館で池田文庫の展示をやっています。それを御覧頂くのが最も早いのですが、先生が読まれている本はかなり高尚なもの、難解なものが含まれております。なかでも特に好きだったものの一つに『プルターク英雄伝』があります。この本でわかるのは、著者であるプルタークという人が、結局、自分の信念を貫き通したということなんですね。どんな評価をされようと

も、自分の信念を貫き通す正義、これが書かれています。正義が通用しないのは、それは社会がおかしいからであって、正義を貫き通せば、最後に勝利者になる、と著者は書いている。この『ブルターク英雄伝』も少年期の先生をきちっとした方向性にもっていった一冊なのではないかな、と個人的に思いました。読書が一番重要だったということが分かります。

さて、池田家は関東大震災以降、海苔の生産がうまくいかなくなります。お父様はリュウマチになり、思うように働けず、事業はだんだん傾いていきました。そして、先の糍谷3丁目の家を手放すことになります。池田家は糍谷2丁目に引っ越しました。しかし、そこもそれほど小さな家ではないんですね。ところが今度は強制疎開させられてしまいます。この家は軍需施設に転用されるくらいの家だったようで、けっして小さくない。その間、体の弱いこともあって、先生のやっていたことは読書なんですね。「読書ノート」をつくらせている。それを見ると、かなりきちっと読みこんでおられます。読書の手引きなども読まれている。そういうのが無いと、戸田先生と出会って、戸田先生に対して、自分の悩みや思っていることを伝えるのは難しいことですよね。読書を通して、「愛国そして正義とは何か」、「人間はいかに生きるべきか」と戸田先生に質問をぶつけます。戸田先生は牢獄の中で色々と考えられていたから、ポンポン答えられる。その戸田先生の人格に引かれて、池田先生は入会されるわけですね。その時に抱いた信念のままに、池田先生は生きてこられたのだなと感じます。

話がなかなか創価大学へいかないのですが、ここから徐々にその方向へ話を向けていきましょう。

牧口先生と戸田先生の間では昭和14年以降、創価教育の機関についてさまざまに語り合われていたようです。牧口先生は「創価教育を体現する形での教育機関をつくりたい。だけど、自分の代でだめだったら戸田君。君の代で頼むよ」と、託されておられました。戸田先生は、それをずっと暖められてきた。牧口先生は貞子さんに「僕の葬式で真っ先に焼香するのは戸田君だよ。君達はその次だ」と言われていたそうです。牧口先生は、すべてを戸田先生に託されたわけですね。池田先生が書き残してくださったからハッキリと分かるのですが、池田先生の『若き日の日記』があります。そこに次のように書かれています。

「昭和25年の11月16日（木）12時寝る。部屋が寒く困る。火の気全くなし。

M宅にて臨時座談会を催す。猛反対の出席者に、対治悉檀をなす。

昼、戸田先生と日大の食堂にゆく。

民族論、学会の将来、経済界の動向、大学設立のこと等の指導を戴く。

思い出の一頁となる」

この記述により、日大の食堂で、戸田先生が池田先生に大学のことを初めて話されたのがわかります。戸田先生から池田先生に大学の設立ということが受け継がれた日だと特定ができるわけですね。昭和25年というのは、どういう年かということ、戸田先生が大変な状況の時です。出版社が全てつぶれ、『少年日本』という池田先生が編集されていた本も廃刊になった。出版の仕事ではにっちもさっちもいなくなる。日本正学館も解散せざるをえない状況であった。その後、「東京建設信用組合」という会社を立ち上げるのですが、この会社は完全な金融会社でした。日本正学

館の社員を全部移して東京建設信用組合の職員にするのですが、これもなかなかうまくいかない。そして、倒産してしまうわけです。昭和25年8月22日に「東京建設信用組合の営業を23日付で停止」せよとの大蔵大臣の命令書が届きます。これが戸田先生最後の事業でした。戸田先生がなんとかしようとしたが、それがかなわなかったのですね。昭和25年は戸田先生にとって最もつらい年でした。8月22日、23日にそういうことが起こっており、その年の11月というのは、東京建設信用組合の事後処理のために、戸田先生と池田先生が二人でいろんなところを回っている段階です。

この16日の前日、前々日の日記をみると、池田先生は静岡に出張しています。14日に伊東に行って、午後7時に知人に会い、伊東に泊まられます。はじめて一人で旅館に泊まったそうで、かなりいい旅館だ、一人で泊まるのもいいものだ、というような事を書かれています。先生がまだ22歳の時です。次の日の朝は午前7時30分の電車で東京に帰ってこられている。そういう仕事が続いていたようですが、日記からうかがえます。こうした状況の中で11月16日を迎えました。この時、池田先生は戸田先生から大学の建設を託された。これで、池田先生の生命の中に、創価大学の建設の炎がついたということになりました。

私達は「創価教育研究所」で仕事をさせていただいていますが、実は2000年11月16日に「創価教育研究センター」という、研究所の前の形の研究機関を立ち上げましたが、どうしても2000年の11月16日に立ち上げたかったんですね。それは、戸田先生と池田先生が語り合った日からちょうど50周年にあたるからです。その願いが叶い、なんとか立ち上げることができました。色々な資料を集めてまいりました。そして、昨年（2006）の4月2日に創価教育研究所が発足しました。これで文部科学省に認められた大学付置の研究所になり、今後は誰はばかることなく、池田先生の研究を進めることができるようになりました。今年も様々な調査を始めました。研究センター時代には、とにかく資料を集めるだけ集めました。色々な方から資料を寄贈していただいたり譲っていただきました。そうすると、集めたのは良いのですが、何がどこにあってどうなっているのかよく分からなくなってきました。僕達は恐らく7万から8万点の資料があるんじゃないかと思っていましたが、集めておいて何も分かってないとは何事か、と理事長・学長から言われ、ちゃんとしろと言われ（笑）、今年（2007）に入り調査をしたら、概算ですが、20万から30万点あることがわかりました。それを今、一生懸命、目録化しようとしています。目録を作らないと、資料の出し入れができませんので、これができてくるともうちょっと研究が進むんじゃないかと思っています。ただ、お金と時間がかかりすぎる。学生アルバイトに一件一件打ち込んでもらってしまして、大変な作業になっています。

この作業をやっている途中に寮生の中心者の方々から、特に「滝山寮」開学以来の資料がある。滝山祭の際、池田先生が箴言を書いてくださった皿と壺なども含め、かなりの量の資料があり、自分たちだけではどうにもならないので研究所で預かってくれないかという相談がありました。お皿とか壺は、壊れてしまつては最後ですから、二度と復元はできませんので、それではということでそれらを預かってきました。すると、今度は学生自治会、大学を守るために頑張っている学生による学生のための組織ですが、池田先生が和歌をよまれたりなどして激励されている直筆の原稿などがのこされています。これらも地下の条件の悪いところに保管されていたので、後世

に残していくためには、きちんとした保存管理が必要だということで、これも研究所に託されました。ダンボール40箱以上にもなりました。しかしながら先生の直筆のこうした資料も傷んだりしていて、補修が必要なものもあります。研究所になったおかげで、こうした動きもできるようになってまいりました。今後、創立者研究が進むだろうと思います。この5年がまさに勝負なのではないかと決意しているところです。

3. 創価学園の創立と創価教育

(1) 大学・学園の設立構想

これまで創価教育の源流ということで話をして参りました。牧口先生、戸田先生、池田先生の人生を通じて、創価大学、創価教育へ向かっての一つの流れというのをご紹介させていただきました。

それで、今度は、池田先生に受け継がれた創価大学設立というのが、どういう形で実現していたのか。それが、どういう意味を持つのかということを、まず「創価学園の創立と創価教育」ということで考えてみたいと思います。

大学・学園の設立構想ということなのですが、昭和39（1964）年の6月30日に行われた「第7回創価学会学生部総会」で創価大学設置の発表が行われました（年表参照）。創価教育研究所にそのときの『聖教新聞』が保存されているのですが、「新時代の希望、学生部」という1面トップ記事のキャプションの一番最後のところに、

「最後に、池田会長から正本堂を建立した後で、仮称創価大学設立等の重大事項の発表があった」という文言が書かれています。記事の中の見出しは

「5万の学生と共に進まん 正本堂完成後創価大学（仮称）を設立」
と。こうした形での発表になっていまして、該当の報道記事は「世界の平和に寄与すべき人材育てる」という中見出しが書かれ、池田先生が学生部の総会で発言された内容が、そのまま記事として掲載されています。これが正式発表と受け取っていいと思います。それを紹介してみましょう。

「まず本日は最初に、将来、公明党が軌道に乗り、また正本堂が建立された暁、それ以降に仮称“創価大学”または仮称“富士文化大学”を設置したい。その大学で、世界の平和に寄与すべき大人材をつくりあげたい。そのときに、諸君のなかから、大仏法を根底とし、各専門分野における大教授がでて教鞭をとっていただきたい。その目的達成、すなわち世界の大指導者に育てあげるために、その大学でがんばっていただきたい」

こういう発言がありました。これが創価大学設立構想の発表とよべる全部です。ここで分かることは一体何かというと、「公明党が軌道に乗り」と書いてありますから、この時期まだ公明党は軌道に乗っていなかったということでしょう。軌道に乗っていないから、軌道に乗せないといけな、という先生の問題意識がまずあり、その当時の非常に大きな目的であった正本堂の建立ということが掲げられている。その後色々な変遷があるので、これもとやかく言えないのですが、そのときの一大目標に、正本堂の建立ということがあった。その2つの大きな課題が終わった後

に、大学を作りたい。こういう構想なわけですよ。『その大学で世界の平和に寄与すべき大人材をつくりあげたい』という発言があり、そして、この学生部の、この日に参加しているメンバーに、『この大学で教鞭をとってもらいたい』と続きます。この会合に参加していた人たちというのは、みんな本当に生命に刻みこんで聞いていたようで、皆さんがよくご存知の教員では、高村忠成副学長補がいらっしゃいます。明日多分ここ池田講堂で夏季大学講座の御講演がありますが、高村先生もそのとき学生部の一員として参加されていた。そこで『自分は創価大学に行って、教鞭をとるんだ』って決めたっておっしゃるんですね。そういう、教員の方が結構いらっしゃいます。残念ながら昭和39年、私はまだ小学生ですね。いいですね、この年齢差がなんとなく出るところが。しょうもないところで優越感感じてお前どうするんだっていう感じなんですけども（大笑い）。

僕たちの先輩の先生方は、やっぱり池田先生の創価大学設立構想の発表を聞いて、大学で教鞭を取りたい。こういう先輩方がいたわけですね。その先輩たちのおかげで、今の私たちがあるんですね。

その後、翌昭和40年の1965年7月30日。文京公会堂における教育部の第4回幹部総会で「創価中学校・高等学校の設立および創価大学の設立委員会の設置」が発表されました。したがって、まず初めに大学の設置がうたわれるんですが、この後に引き続いて発表されたのが、「創価学園」の設置だったわけです。その後に「創価大学設立審議会」が発足し、11月26日にその第1回目の会議が開催されました。そこで「創価高等学校を大学に先がけて建設する」という予定が発表になります。

実は、のちの話なんですけど、昭和43（1968）年に「創価学園」すなわち創価高校と創価中学校が開校いたしました。第1回の入学式が昭和43年の4月8日に行われました。すいません私事ですが、僕は創価中学の1期なんです。親に感謝してます。よくぞ、こういうときに産んでくれたって（笑い）。創価中学の1期で、ちょうど昭和43年に中学1年生になるのですね。それで、思い出話になっちゃうんですけど、やはり第1回の入学式というのはすごく衝撃的な思い出でして。新しい講堂で、1234席あるんですね。今、新装になってその当時とはおもむきが変わってしまいましたが、その講堂で入学式がありました。池田先生はご出席されなかったんですね。今、創価学会本部に勤めていらっしゃる「梶岡 誓」さんという先輩が新生生の代表挨拶をされました。梶岡さんは、名前を「誓」と書いて「ちかお」と読むんですが。「新生生のちかい かじおか ちかい」なんて訳わかんないシャレのような紹介があったりして（笑い）、そういう「同じような名前の人っているんだなあー」などと思いながら参加していたんですが。それで1年間私たちも授業を受けたわけですが、これが悲惨な、悲惨というとおかしいのですが、僕ら中学1年生ですよ。そうすると、学校には高校1年生と中学1年生しかいないんですよ、始まった時は。1学年分ずつですから。僕達中学1年生の中学校の先輩というのがいないんですね。直接、高校の1年生が僕たちの先輩なんですよ。だから、生意気な中学生になるはずですよ（笑い）。アメリカ創価大学の羽吹学長とか大学の田代理事長とか副学長の馬場先生、こうした方々が僕たちの先輩なんですね。年の離れた兄貴みたいな感じでした。その後、2期・3期の先輩方が後から入学して

こられました。創価学会の正木理事長は3期生ですからね。「後から入ってきて、何威張ってんだよ」みたいな態度をとるわけですよ、中学の1期生というのは（笑い）。後輩がすごく威張ってですね、今全然立場が違いますからね、そんなこと言うと怒られますけども（大笑い）。1年目の学校はそういう感じでした。生徒がいなくてガラガラでした。もう好き勝手やってました。学校中走り回ってましたからね。それで高校生に注意されたりして。高校生は高校生で後輩がいないもんですから、僕達を可愛がって下さいました。二重の意味でかわいがってくれる（笑い）。読書などもですね、「この本読め」「あの本読め」ってすすめてくれるのですが、全部高校生の本なんですよ。僕たちは中学生のレベルが分かりませんからね、高校生のレベルの本を読んで。まあ一、小生意気な中学生だったと思いますね（笑い）。だからこんな偏頗になっちゃったって、最近みんなから言われていますけれども（大笑い）。

（２）開学時の学園生活と創価教育

さて話をもとに戻します。またどこか思い出話がでるかもしれませんが、それで1年間経った時に、池田先生から「学校の1年目が終わったところで1年間の歴史を残したらどうか」というお話がありました。それで僕達が中学2年、高校生も2年生になって2期生の1年生が入ってきた時に、『建設の一年』という校史を作ろうという計画が持ち上がりました。そこで中学生5人、高校生5人が編集委員に選ばれて、国語の先生をはじめとした先生方が中心になって、編集委員会というものができました。昭和44（1969）年に入ってから、その編集作業がすすめられました。昭和44年の7月17日にこの本は完成するのですが、その年の2月くらいから、編集作業が続けられたんです。奇しくも、私も編集委員の一人にいただいたおかげで、色々なことがそこで経験できました。今考えると、本当に恐ろしいことに、月1回必ず池田先生と食事をしながらの編集委員会があったんです。今でも覚えていますけれども、「博文」というレストランの白いラーメン。白いおつゆのラーメン、珍しいんです、その当時ね。「これ、おいしいんだよ」と言われて。デザートは必ず四谷の、先生がずっと好きだった、鯛焼きですね。「これは尻尾まで餡子が入ってるんだから」って言いながら。必ずこのパターンですね。ラーメンと鯛焼きの編集委員会。そのたびに色々なお話をしていただいて。それで生徒の方は自分たちの学園生活の1年の思い出、1年やってきたことをまとめたのですが、その『建設の一年』に先生が「発刊によせる」という一文を寄稿して下さっているんです。学園が誕生したということで、初めてだと思うのですが、先生のお名前が直筆の形で入っています。先生の直筆の文字が印刷されるなんてことは初めての出来事だったと思うんですが、「発刊によせる」に先生の名前を入れて頂いたことと、『建設の一年』という本の中扉も先生の直筆の文字で書いていただきました。その当時、やはり色々なことをお考えになっていて、次のように書かれているんですね。

「破壊は易い。

そして建設は至難だ。

至難の業に進んで当たる者こそ真の勇者である、と私は思う。

今、世界のあらゆる国で、学園を舞台に破壊の嵐が吹き荒んでいる。

諸君たちはその中で、ただ一つ
未来21世紀への建設の息吹を湛えた、希望の灯火なのだ。
世の人々は、まだこの光明に気付いてはいない。
破壊の疾風と怒濤の中に、必死に捜し索めている、
というのが実態であろう。
だが、時代の進展とともに、正しい心の指標として、
みなが求めてくることは、間違いない。
私が諸君たちに願うことは、
権力者になることでもなければ、金持ちになることでもない。
人間として、正しい、輝く生命の当体を
確立しきっていただきたい、
ということである」

このような「発刊によせる」を書いてくださった。中学生、高校生が読んでわかるんだろうか、と思うような本当に高尚な理想を説かれています。僕たちも様々な場面で池田先生のお姿を拝見していますが、僕自身の実感としてすごいと思えるのは、どんな要人、外国の偉い大臣であっても、このような中学生に対しても、同じ姿勢で臨まれることです。人によって態度を変えらるというのが通常の間人だと思ひますが、創立者はそういうことが無い。そこが僕は素晴らしい、僕が素晴らしいというのはなんです、すごいと思ひますね。

この本の中で当時初代の学校長であつた小山内先生、つい数年前にお亡くなりになつたのですが、この小山内校長先生が「沿革」ということで、どうやって学園が作られたのかを詳しく書かれています。これをみていくと、諸先輩が創価学園を作るために本当に様々なご苦勞をされていることが分かります。例えば昭和41（1966）年の11月に設立された創価大学設立審議会。この審議会は、理事長（当時）の北條委員長以下36人の委員で構成されていたということ。11月26日に第1回の会合が持たれて、この席上で「設置基準委員会」・「大学専門委員会」・「高等学校専門委員会」という3つの委員会が設けられ、審議が行われて創価学園の設立に至つた。こうした詳しい内容が書かれているんですね。こういう一文を読むとですね、本当に『建設の一年』を先生が提案され作製されたわけですが、のちのち本当に重要な資料になるのが良く分かります。これが残されていなかったら、学園の設立の状況ということ調べるのは、かなりの苦勞が必要であつたと思ひうんですね。

もう1つ。この学園の『建設の一年』の中には、例えば、「創価学園の入学式を祝う」という、当時の第1回入学式の時の創立者のメッセージが残っています。そのメッセージの中にも同じようなことですが、次のようなことが述べられています。

「文明といい、政治・経済・科学・産業・芸術といつても、全てそれらを支配し、創造する主体は人間である。しかして教育は、人間自身を対象として行ひ、次代の世界を決定付ける最も重要な事業である。アリストテレスいわく『国家の運命は、かかつて青年の教育にあり』と」

非常に格調高いメッセージです。こうして『建設の一年』を再読してみると、本当に開校までの準備がいかに大変であったか、ということが手に取るようにわかります。

先ほど大学の設立準備委員会と審議委員会の話をしましたが、ここでは、たとえば校舎をどういうふうにするんだろう、どういうデザインにすればいいのか、どのような設備を整えればいいのか、などということに関して、本当に様々な方々が携わってくださっていました。色々な審議がなされていた中の一つに、芸術部を中心として校章を作る、シンボルマークですね、このデザインも考えられていたんです。最終的に「ペンと鳳雛」という校章に決まっていますが、そこに至るまではですね、生半可な準備ではないということが、インタビューで分かりました。最終的に「ペンと鳳雛」の原案をデザインした方は今、千葉県に住んでおられる平本雅宣さんという方なんです。この方はもともとグラフィックデザインでポスターを作るとか、イラストを描くといった仕事をしてみたい、ということでずーっと勉強してこられた方です。大学は東京芸術大学を目指して、一生懸命勉強した。しかし、うまく入ることができなかった。一浪して落ちて、また二浪して落ちてしまった。最終的に二浪もして落ちてしまっただけで色々辛かったので、創価学会の先輩に相談に行った。相談をしに行ったときに、「それだったら、そういう仕事をする人たちの集まりで芸術部というのがあるから、その芸術部の中に入って、自分の勉強をすればいいんじゃないか」というアドバイスを頂いたようです。最終的に「東京デザイナー学院」という専門学校に入って、それで「自分はこんな仕事してていいのか」と悶々としながら勉強を続けていたんです。それで学会の先輩も芸術部の方を紹介してくれていたようですが、その中に日本画の絵描きさんがいらっちゃって、この方が、ある時、平本さんをつかまえて、「これが将来、創価高校の校章になるんですよ」といって見せてくれた。その方のお宅の仏壇に描かれたデザインが2つ置かれていたそうです。その時に「あー、すごいな。僕もそういう仕事をやってみたいなと思うたんです」とおっしゃっています。

ところが、この日本画家の方が描かれた校章のデザインが、池田先生のところに届けられたそうですが、それを見た先生は、それをボツにされた。どうしてそうなったかという、これは後に池田先生からお話として聞かれたそうですが、1つは正本堂をかたどったデザインだったそうです。もう1つは、富士山をかたどったデザインだった。これが候補としてあがっていたんですね。今考えると「うーん、なるほど、そうだったんだ」というのが分かるんですけどね。今、先生が色々なことやられてるんですが、結局後から分かることが多いですね。その時にやられていたことが、どういうことなのか、本当によく分からないんです。その時もやはり、当時の正本堂というのは一番大きな目標でしたから、正本堂のデザインを作った。もう一つは富士山だった。それを見た先生は何ておっしゃったかという、「宗教色のないものにしろ」。こう言われた。それでやり直しになったそうです。

やり直しになった時に、平本さんが様々な芸術部の先輩から「君も一緒にグループに入ってやってみないか」と誘われたそうです。芸術部で校章をデザインするグループにあこがれを抱いていたわけですから、「いいな、すごいな」と思っていたので、「ぜひお願いします」ということで、平本さんはそのグループに入ったんですね。若い学生の年代だったのは、平本さんだけだったそ

うです。あとはベテランのデザイナーの方ばかりだったんですね。それで、そういうグループの中で色々な議論をした。校章への池田先生の構想はどんなものだろう、先生の構想にかなうものを描かしてもらいたい、と祈りもした。そうこうしているうちに、昭和41年になりました。最終的には平本さんは公明党の職員になっていくんですが、衆議院選挙が42年に始まるので何とか年内に進めよう。忙しくならないうちに、やるべきことは全部やっちゃおうと決めてですね、それで、当時学会の教育部長であった柏原先生の所に集まって、みんなでデザインを並べたそうです。それで、デザインの案を5点までしぼって、それで池田先生に見ていただいて、決めていただくという話になった。その5点のうち2点が平本さんのデザインだったんです。やはりどこかで合ってたんですね、合致してたんですね。

年が明けて昭和42（1967）年、デザイングループのメンバー7人が学会本部に呼ばれた。そして柏原さんが、「平本さんでどなたですか」と聞かれた。返事をするに「あなたのデザインに決まりました」と言われた。平本さんは「デザインに自分の使命があったんだな」と。もう退転できないなと思った、ということをしみじみ語ってらっしゃるんですね。ですから、ここではじめて、校章が決まったわけです。創価大学の校章も、結局その鳳雛とペンの形の下に「university」と入っているだけです。原案ができたということなんですね。

校章のデザインの発想は、英知・栄光・情熱の三色は決まっていたので、そういうことも頭にあった。そして、知性・英知の象徴であるペンに絶対が必要だと思った。つまりあのペンは、知性と英知の象徴なんですね。真ん中のペンは、そういうことで描かれていた。作った人はそういう意図を含ませているわけです。ただ、不思議なものでデザインは形から入っていく事が多い。理屈を結びつけるのではなく、とにかく「こういうかたちはどうだろう」と思いつくままに書いていくと段々いいものになっていく、ということだそうなんですね。だから、真ん中がペンだと言う事は決まった。それから鳳雛になっていくんですが、こんなことを平本さんはおっしゃっているんですね。「学会員の一部では、鳳雛の嘴が開いていると言われている。校章の左右の広がっているところもイメージ的には地から湧き出す噴水のように人材が飛び出すところ。地涌の菩薩が世界に羽ばたくところ。四方八方に人材が飛び出していくところ。真ん中のペン、すなわち英知の学園から人材が四方八方世界に飛び立っていくところ」というイメージがあったんですね。

作った方の意見を聞くと「あー、なるほど」そういう意図が含まれた、すごい意味の深い校章だなということが僕らもはじめて分かりますね。また、「お互いが助け合うんだから、1人ではなく2人だ」というところで、左右に2羽同じものを置いた。こちらは「助け合っていく」ということで置いた。深いですね、これは。僕も今回夏季大学講座がなければ、こうした資料には出会わなかったんですね。よく読んでみると、やっぱり「夏季大学講座、大事だな」と思いながら、自分でしみじみ実感するんですが（笑い、拍手）。

それで鳳雛として見る場合、嘴が下向きになって、鳳雛の顔が向き合っているイメージで描いた。嘴が開いているという解釈も、デザインは見る人それぞれのイメージだから構わない。また、横にしてみると左右の広がりには鳳雛が羽ばたいている姿にも見えるようになっている。実際に実用になっている正式デザインの原本にするには、「このカーブはこういう角度で」というようなデ

ザインの原案をもとにした極めて緻密な数学的な製図が必要で、それはまた別の専門の人が担当した。だからデザインで「真ん中がペンで、両脇がこういったような形の鳳雛になるよ」ということを、平本さんはデザインの原案として出したんですね。その後は、もうきちっとした、本当に緻密な角度で描いた校章になったということなんです。

今、創価大学グッズ色々出ているんですが、少し緻密さを欠くとですね、変なバランスになっていて。「何かこの校章おかしいな」というようなものもあるんですが。本当にこの生命を削ったような平本さんの中から校章が出てきたんだということがしみじみ分かります。

最後にこうおっしゃっています。「今や幼稚園から大学、そしてアメリカ創価大学まで創価教育の全ての校章となって、本当に感慨深い。創価学園が開学したときは、僕のデザインした校章をつけた生徒を見て、『やったー』という嬉しさの実感がわいた」。こうおっしゃっているんですね。本当にその通りだと思いますね。私達も学園生の頃、帽子をかぶってね。帽子の真ん中にこう校章がついているんですね。誇らしげにつけて歩いてましたね。こういうような背景があって、生まれたそうです。

何が言いたいのかというと、本源的に池田先生の発想であり、戸田先生の発想であり、牧口先生の発想から学園・大学ができていくんですが、その発想だけではいかんせん何も始まらない。その発想に基づいてみんなが一緒になって同じ思いで作ろう。何か始めよう、と思った時に、こうした歴史に残る1つひとつのものが出来上がっていくんだということなんです。そのことを、こういう方々の体験を通じて、私どもは勉強させていただいています。

さて、創価学園は昭和43（1968）年4月8日に開学しましたが、入学生の半分は通学生だったのですが、半分の生徒は寮に入りました。池田先生は寮生活がすごく大事だ。寮生活が人格を形成するんだ、ということで、寮にも何度も行かれました。1年目からかなり寮にも行かれて、寮生の色々な話を聞かれたり、それから質問会なども開催して下さったんです。例えば、昭和43年の12月21日に寮生との会食会で、ある生徒が、大きくなったらアフリカ、特に南アフリカの人権問題についてどうしても解決したい、とそう思った。それで学園の先生にも相談したけれども、一体どうしたらいいと思いますか、と先生に聞くんですね。先生は

「語学を勉強しているのか。語学を勉強しなかったら、理想をいくら言っても解決しないよ」そして、こうおっしゃってます。

「語学なくしていくのなら、アフリカ問題の解決は夢に終わります。夢はあくまでも夢なのです。理想はどこまでも理想なのです。そうでしょ」

生徒は「はい」って言いました。先生は

「それができる裏づけ・実力があり、理想を実現できる武器がなければならないんだ。その武器は何か。絶対条件として、これは語学なのです。語学がマスターできた、ということから始めなさい」

そういうような指導をがっちりされているんですね。1つひとつの生徒の思いというものを受け止めて、その生徒にあった指導をしてくださっているわけです。

2年目になりまして、これは僕も思い出に残っているんですが、初めて夏休みに臨海学校と林

間学校とが始まるんですよ。ところがね、学校を作るというのはものすごいお金がかかるんですね。それで、予算が無かったんでしょうね。これは想像ですけども、臨海学校と林間学校をやりたいけど、特別にそのための施設が作れない。それで、先生はどう考えたかという、林間学校は現在の箱根の研修道場。臨海学校は現在の三崎の研修道場。この研修道場を学園生に開放したださり、臨海学校をやったんですね。僕も2年目、箱根の林間学校に参加させていただきました。もう、すごく楽しみにして林間学校に行ったんですが、箱根に着いたらですね、先生がいらっしゃるわけです。今では考えられません。学園の林間学校に先生がいらっしゃるなんて。先生がいらっしゃってですね、こっちはまだ子供ですから。「あー、先生」みたいな感じで、すごくなれなれしくですね、先生と接触させていただいたんですけども。僕らは、研修道場のあてがわれた部屋で、中学生ですからね、エネルギーの塊というか、怖いもの知らずというか、電池が切れるまで遊び続けますからね。まあ、何も考えずただ遊んでいたら、庭のほうからガラッと窓が開いたんですよ。窓を開けたのは先生だったんですね。「おう、何やってんの」とか言われて。「まあ、こっちは早く出ておいで」。「何ですか」って喜んで窓から覗いたら「ここに池があるんだ。この池の中にね、芦ノ湖でとったハヤという魚がいるんだ。このハヤという魚はすごい早いからハヤっていうんだぞ。今、私がとってみせてやるから」とおっしゃって先生が、虫を採る網がありますよね。それを池の中に突っ込んで、素早くかき回すんですよ。しかし先生がものすごい早さで引っ掻き回したんですが採れなかった。そうすると「魚も生きるのに必死なんだ」とおっしゃって、庭の方に歩いていってしまわれた。僕たちは「あれー、採れなかったんだ」って（笑）。そういう貴重な思い出がありました。

翌年、中学3年生のときに三崎の臨海学校に参加しました。今年の『潮』の2月号で神奈川の研修道場で学園生と語り合っている写真をのせていただいたんですが、その三崎に行った時も先生がいらっしゃって、学園生1人ひとりを激励していただきました。今でも思い出に残っているのですが、僕も先生からある1つのご指導を頂きました。それはどういうことかという、「いつまでも学園に甘えてちゃいけない。母校を守れるような人間にならなさい」という厳しいご指導でした。それが僕自身の原点の1つにもなっていることなんですが、その当時の中学生・高校生と創立者のつながりというのは、いたるところでありました。その時まだ先生40代ですからね、まだまだ若い。歩くのは早い。神出鬼没。どこから現れるか分からない。そういう感じの先生でした。その意味では、当時の初期の学園というのは先生との思い出が沢山詰まっていると思います。

創価高校の1期生が卒業する年、それが昭和46（1971）年。この高校の1期生が卒業する年にあわせて大学が建設されました。開設されたということです。昭和48（1973）年の開学の予定であったものを2年間前倒しをして、それで創価大学を作るということになりました。この設立について先生は様々な思いがあったと思います。それは当時の大学の状況です。大学をとりまいてる状況が、いかなるものであったのか。その状況がやはり2年間の前倒しを決定した大きな要因であろうと思うんですね。

4. 創価大学創立の時代

(1) 創立時の時代背景

当時の状況はどうであったのかというと、同じ時代に生きて当時の大学紛争の色々なことを経験されている方もおられると思いますが、僕自身は高校生だったので先輩たち、学園の先輩ではなく高等部で知り合いになった先輩たちが高校闘争をやったり、大学紛争で戦ったり、戦うといっても色々なことをやられている姿を見ておりました。ただ僕たちは大学に入っていませんでしたから、大学紛争の根本的なところは、よくわかっていないんです。それで当時何がどう起こったのか、色々調べてみました。そしたら、いわゆる「全共闘」と呼ばれる人たちがいて、この人たちの色々なことがぶつかりあって、あの1960年代後半の学生運動になっていったんだということが少しずつわかって参りました。もとをただせば、60年の安保闘争になるわけなんです。そこまでいくとどんどん話が膨らみますので、ちょっと話を縮めるために、創価大学ができる前後の話に絞ってお話ししましょう。

1960年代の後半、各地の大学で紛争が相次ぎました。その最も早いといわれている大学紛争は1965年の4月です。高崎経済大学という大学で、地元優先の委託学生入学の反対が起きました。つまり、高崎経済大学ですから、高崎にあって、みんな平等にというよりも、高崎の地元の学生たちを優先的にとるんだ。こういう地元優先入学をやっていたということに対して、学生たちが反対しました。学生たちが反スト、ストライキですね、授業放棄に突入していきました。これがそもそも日本における学生闘争の始まりだったようです。中身的には、入学に対する不平等さ、それに対して若者たちが立ち上がった、というふうにいえると思います。それから1966年には早稲田大学で授業料の値上げ反対闘争が起きました。学生たちが大学の本館を占拠いたしまして、それで闘争を繰り広げていきます。その2年後、1968年、これは覚えていらっしゃる方も多いと思いますが、日本大学で20億円の使途不明金が発覚いたしました。それはなぜかということ、当時の日本大学の経営の形態がワンマンスタイル経営者による大学経営で、この大学の運営に学生の不満が爆発いたしました。同じく1968年、東京大学医学部の学生自治会が、無賃労働に等しい登録医制度に反対して、無期限ストに入りました。これは医学部で登録医ということで働いて、いわゆる勉強だということで、色んな治療とか診察の手伝いをさせるんですが、それを無料でやらせていたわけですね。それはもう教授が全ての権力を握っているから逆らえないんですよ、学生たちは。学生たちが逆らえないということを利用してやった。それはおかしいんじゃないか、っていう声がやはり上がってきたということです。このようなことが続きました。いったいどうしてこういうことが起こってきたのかということなんですが、当時の中核派、中核派には全国学生連盟というのがあって、その全学連の委員長だった秋山勝行という人がいます。この人と、情報宣伝部長の青木忠という方の共著『全学連は何を考えるか』という本があるんですが、この中でこの二人はこういうふうに言っています。当時の学生の声を代弁しているんですね。自分たちが何で学生運動を始めたのか、こういう事をこの二人は書いています。要約しますと次のようになります（小熊英二『「民主」と「愛国」』より）。

「われわれのすべては、大きな希望をもって大学に入った。だが、新しい希望にもえ、現代

世界に目を開いた学生に、大学が与えるものはあまりにもおそまつである。現代世界の生き生きした問題意識は、教授や教室からは全然感じ取ることができない。定員をオーバーする学生をつめこみ、マスプロ化し、大学に入学したとたんに、高校生活とは全く異質な群衆の一員に自分になってしまう。近代的なビルのなかに生活していることは、いいようなない人間空白であり、大学の当局者からすれば、授業料を収める『モノ』として数えられてしまう」

つまり、学生達が本当に希望に燃えて勉強をしようと思って大学に入ってきたんだけど、大学はそれに何も応えてくれていない。自分たちを授業料だけを取めている「モノ」のように見ているのではないか。こういう不満が根底にあったんですね。だから自分たちはこんな大学で勉強するつもりはなかったんだ。おかしいじゃないか、ということで、その鬱積した思いが爆発していったのが1960年代の学生運動だったんです。そしてこう言ってます。さらに、秋山氏と青木氏の話なんです、

「学生数の圧倒的増大は学生の社会的地位を著しく変化せしめ、大学を卒業したからといって、大企業に就職するとは決していえない。それは、学生そのものが、社会のなかで、例外的存在であることから、マスのなかの一員としてしか見なされなくなってきたことと無関係ではない。今日の学生運動は、すでに述べたような社会的地位の変化、エリート意識と存在の決定的欠落、そして、マスプロ化していく学園のなかにあって、たえず人間としての真実を取り返したいという欲求が大衆的に広がっていくことを基礎において成り立っているのである。このような背景のもとでの学生の不満と不安のうっ積は、どのような契機から学園紛争が爆発しても、同じような全学的闘争として発展していつてしまうのである」

ですから、当時、何かのきっかけがあったら、すぐそれが爆発するような、そういった状況にあったことは間違いないんですね。その中であって、池田先生はどういう大学を作ろうとしたのか。そういう社会的な状況があって、そこに創価教育という中核があって、その二つを考え合わせて、創価大学を2年早く作るんだ、とこういう結論になってくる。昭和43（1968）年の5月3日に池田先生が、「第31回創価学会本部総会」で述べられている内容なんです、この出典は『21世紀の潮流』です。現在は『創立者の語らい』というタイトルになっていますが、これは池田先生が大学について述べられたことを学生さんの手でまとめた本です。ここでは『21世紀の潮流』の昭和54年版を使いました。だいたい自分が卒業したころの本で、一番使い慣れていたものですから、それをもって来ました。全部読むと時間ありませんので、一応重要と思ったところをあげてみました。

「教育は、次代の日本を、世界の動向を決定していく、最も重要な事業であります。しかし、これまでの我が国では、政治家や指導者達が、あまりにもこの問題に対して無関心であった。のみならず、かえって政治の支配下におこうとし、あるいは教育を政争の具にしようとして、種々の干渉が強化されていく兆候すら見受けられる」

つまり、若者たちの考え方を政治に利用しよう、若者のパワーをうまく権力者側が取りこもうとしているんだ、ということを鋭く見抜いているところですね。その後に、大学論が展開されて、イギリスのオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、パリ大学、ハーバード大学などの

例が出されます。キリスト教に対する宗教批判の問題は別として、とことわった後、

「ヨーロッパの大学がいずれもそうした精神的支柱をもち、崇高な理想を追求する使命感に貫かれてきたことは事実であり、そうしたなんらかの精神的支柱があつてこそ、真の大学といえると思うのであります」

これが述べられているのは本部総会です。創価学会の1年で最も重要な大きな会合で、こういうことを述べられているんですね。日常的な会合で述べられているのではなく、最重要の会合で述べられているという点で、まさに先生の考え方、創価大学の根底的な部分を語られているんだ、と考えざるを得ない。

ここでは色々なイギリスの大学の事例がかかげられていますが、確かに大学の歴史を紐解いていきますと、大学と言うところは、神学、神の学、を勉強するところなんですね。イギリスの大学に行くと、キャンパス、カレッジの中に必ず、教会があります。ミサをするところがあります。それで、寮に入って、朝晩の食事をする時は、神に感謝をするということが、生活の中に入り込んでいっているんですね。大学を卒業すると、黒いガウンを着せてもらいます。創価大学でも着るんですけどね。このガウン、実際はローブといいますが、いったい何を意味しているのかというと、ローブを着て、帽子をかぶると、これは説教、教会で説教して良いという、いわゆる聖職者、宗教者としての立場が認められた、ということになるんですね。ですから、ローブを着るというのは深い意味があります。オックスフォード、ケンブリッジにしても、少なくとも神学者、牧師さん、あるいは、神に仕える、こう人を作るための高等教育だったんですね。ですから、オックスフォード、ケンブリッジというのは、たぶん、1970年代ぐらいまで女性は学生になれなかった。牧師さんは皆男の人ですから。ですから、女性がカレッジに入れなかった。その伝統がずっと続いていっているんですね。創価大学でもローブを着るのですが、あのローブを着るからといって、どこかで何かを話して良いということではないんですが(笑い)、もとの源はこういうことなんですね。ここで先生は、精神的支柱が大事なんだということを話されています。また後で、この点については触れたいと思います。つまり、宗教の基盤なくして、高等教育は無い。高等教育の基盤が何であるべきなのか。これは大事です。この点は、牧口先生時代からの問題意識ですから。大学とか教育機関は教員で決まる、と池田先生はよくおっしゃいます。では、教員がどうあればいいのか。どう生きていけばいいのか。常に僕たちはそれを突きつけられているんですが、そこは、必ず宗教的基盤が無ければならない。基盤が必要である。そういうことを先生が述べられていますので、また後で触れたいと思います。

さて、「第31回創価学会本部総会」での先生の講演に戻しましょう。大学というものが作られた歴史をずっと説かれていくわけですが、視点が日本へ移ります。日本の大学の代表は東大ですが、その東大が何故作られたのか。その目的は、徳川300年の鎖国による遅れを取り戻すために、西欧文明を急激に吸収し、国家のために働く人間をつくりだすことにあった。そしてこの性格は、その後できた他の大学にも、広く深く浸透しているといわれております。「私は現在のわが国の大学教育の限界をここにみるのであります」と、こうおっしゃっている。「ここ」の具体的な点は、大学建設の目的があくまでも国のため、国家のためなんだということ、なんですね。建学の精神と

というのが、少なくとも国を維持し、継続させていくという非常に矮小化された目的になっている。これに対し先生が、違うんじゃないか。大学というのは、高等教育というのは、国とかそういったものではなくて、もっと広く、世の人々のために、もっと広く世界のために、人類のために、そういう人材をつくるのが大学じゃないのか、こういうことをおっしゃっているんですね。これは牧口先生、戸田先生も同じ考え方で、よく言われることは、大学は国立じゃダメだ、私立であることが最も大切なんだというのは、国によって建てられた大学と言うのは、国という枠というか、足かせが完全にかかるわけですね。それでは何にもならないということを問題意識としてもたれていたことが分かってまいりました。

（２）創価大学の理想

次に「第32回創価学会本部総会」の講演を見てみましょう。ここで、先生は、三つのモットーを発表されました。

「人間教育の最高学府たれ、新しき大文化建設の揺籃たれ、人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」

この三つのモットー、これを私達は建学の精神とよんでいます。創価大学、創価大学の教職員、創価大学の学生、創価大学に関わったありとあらゆる人が目指すべき永遠の目標。それがこの三項目なんですね。

この三つについて池田先生はどのようにおっしゃっているのかというと、

「第一は、創価大学は、あくまでも社会を動かし、社会をリードしていく英知と創造性に富んだ全体人間をつくっていく学府でなければならない」

つまり、リーダーであるべきである。リードしていくべき力をつける。これがひとつの大きな目標になっています。二つ目、

「行き詰っている現代文明のなかにあって、大仏法を根底におき、人間生命の限りなき開花を基調とする、新しい大文化を担っていくことであります。だから、文化というのは、大仏法を根底におき、人間生命の限りなき開花を基調とする、新しい大文化を担っていくこと」ここに私達が目指す文化が定義づけされています。そして三つ目。これが本当に重要なんですが、

「人類の平和を標榜したゆえんは、新しき文明の建設といい、未来社会の開拓といっても、平和なくしてはありえないからであります。いかにして平和を守るか、これこそ人類の担った最大の課題であります。過去の指導者は、常に世界を戦乱の渦中に巻き込み、民衆を不幸のどん底にたたきこんでまいりました。今、私どものつくる創価大学は、民衆の側に立ち、民衆の幸福と平和を守るための要塞であり、牙城でなくてはならないと申し上げておきたい」

この事、この宣言が、創価大学の今後の数百年間を貫き通していく生命線になっていきます。これを私達がどう具現化するのかというのが、実際に創価大学に関係している我々の課題になっていますし、今日は皆さん、一日創価大学生ですが、今日一日、というわけではなく、これから同じ目的をもった仲間として一緒に担っていただければありがたいと思います。これがまさに創価大学を作った先生の目的であり、意思であるということになります。

（３）開学時の創価大学

ここで開学時のエピソードをいくつか紹介しましょう。

1971年の開学の時のA棟、ブロンズ像が正面に置かれている建物ですが、A棟に入りロビーがあります。その一番奥に今はエレベーターがあるじゃないですか。その後ろの校舎は、1971年の段階ではまだできていません。何にも無い状況ですね。この時に、一期生が入学してきたんです。よく先輩達が言っていました。何も楽しみがない。楽しいことは何か。大学に行くことである。まわりに遊ぶところがないから大学に行くしかないんですね。だから、開学当初は最高の教育環境にあったわけです、その意味では（笑い）。「ロンドン」という喫茶店が福利厚生棟にありましたが、そこに行かないとコーヒーが飲めないのです。良いことですね（大爆笑）。

それから次に73年。A棟の後ろ側、つまり奥のエレベーターよりも北側になりますが、校舎が新しくできました、3年目にして。正木理事長たちがよくおっしゃるのですが「3期生は、本門の1期」だと。1期生はもともと1期生だから何にもつかないんですね、形容詞は。3期生は、計画通りに行けば、73年に大学ができる。これは決まっていたので、私たちが本来の意味からすれば実質的な1期生だったんだ。だから本門の1期生の自覚を持とうよ、そういう決意の意味ですね。2期生はどうなるのか。2期生は「谷間の2期」と言っていました。本当の1期生と本門の1期生の間に入った谷間の2期だという話を、自分たちで卑下していましたが、僕たちは4期生なんですね。4期生はどう言っていたのか、言われていたのかというと、「無知の4期」でした。「お前たちは何にも知らない」とよく先輩たちから叱られました。学生運動が盛んであったとき、先輩たちは皆、その時の学生問題で議論していますから。僕たちはそれを知らずに大学に入学しました。だから、先輩たちからすれば「お前たちは何を話しても何も知らない。無知だ！」ということになります（笑い）。反省のしようがありません。生まれる年は、自分で決められませんので（大爆笑）。

85年には短大ができます。正門もできてますね。正門ができたのは6期生の時。だから5期生入学の時までは、門は、「栄光門」だけなんですね。「栄光門」は、現在では裏門ということになっています。正門に対置されることになり、「裏門」になったわけですが。ですから、1期生と2期生は裏門から入ってきて裏門から出て行った。3期生から5期生までは裏門から入って、正門から出ていったといわれました。6期からはじめて正門から入ることになった（笑い）。いろいろあるでしょう。こういうので本が一冊書けないかな（大爆笑）。

その後、91年に池田記念講堂ができ、99年に本部棟が完成します。本部棟が建っているところは、それ以前は小高い丘で、まさに学生歌に歌われている「つつじの丘」だったんですね。開学以来37年を迎えます。もうすぐ開学40周年ですが、40年間の発展というのはすごいものがあります。先生の構想がひとつひとつ着実に実現され、たとえば建物となって、構想が推進されていっていることがわかります。

5. 創価大学と創価教育

(1) 創価大学の理想と創立者

それでは、だんだん結論に近づいてまいりました。創価大学の設立、および創価大学のことに
ついて先生が、昭和44（1969）年の6月発行の『現代政治』という雑誌に寄稿されています。こ
れについて、少々ご紹介したいと思います。この寄稿文のテーマは、「新時代拓く大学の未来像―
創価大学の3つの基本理念を提唱―」というものです。

今、私どもの研究所で行っている作業は、先ほどからお話しておりますように、色々な資料を
集めることです。そのなかの最も重要な資料というのは、池田先生が色々な雑誌や新聞に寄稿さ
れた文章です。それらを全部集めようと、作業を続けております。雑誌については大分集まって
まいりました。それでも、先生は次から次へと書かれておられますので、追いかけるのは大変な
んです。どこか途中で休んでいただければいいんですが（笑い）。ここでご紹介する一文は、大学が
できて間もないころのものです。そこで、真っ先にあげているのが、創価大学の特徴といえます
か、中身を述べていらっしゃるのですね。それをちょっと、順番に説明していくことで、創価大
学の理想といえますか、先生が何を目指していらっしゃるのかをくみ取っていきたいと思います。

「現在、世間においては、各大学で紛争が続発し、既存の理念や方策をもってしては、律し
きれない深刻な社会問題になっていることはご承知のことと思います。この果てしない泥沼
に入った大学問題の実態こそ、新しい理念と思想による全く新しい大学の出現を待望する時
代の象徴であると考えたい」

つまり、若い人たちが、自分達が入った大学が全然理想と違う。人間をモノとして扱っている
のではないか。そういうような形になってきているのは、むしろ、新しい大学を望んでいる、そ
ういうことの一つの表れなんだ。だから、我々はそれに対し応えたい。そういうことで、池田先
生は創価大学の設立を考えたんだ、ということを述べているんですね。それで、

「創価大学の第一の特色は、教授はたとえ無名であっても、青年のように旺盛な研究意欲を
持ち、教育に生命をかけて取り組んでいく人を持って構成するということであります」
と述べられているんですね。これは非常に重い言葉で、私どもに課せられた重い言葉であって、
本当に生命がけで教育に取り組まなければならない。言うのは簡単ですが、大変ですよ。

「いかなる革命であれ、真実の革命は、無名の青年によって初めてなされるのであります。
創価大学もまた同じであります。次代の日本の運命を決定し行く、世界平和を築いていくの
は、無名の教授と無名の学生によって作られていく創価大学を置いて他にはないと断言して
おきたいのであります」

「教授と学生との関係は、相互に対峙する関係ではなく、共に学問の道を歩む同志として、
あえていえば、先輩と後輩といった、あくまでも民主的な関係でなくてはならない」

こう述べられています。先ほども話しました学生闘争の最も根本的な問題の一つが教授と学生
とのつながりですね。当時の教授と学生との関係は、殿様と家臣、あるいは王様と家来。こんなよ
うなつながりですよ。王様のいいなりに動かなければダメだ、みたいな形になっていました。
学生を奴隷のように使っていましたからね。そんなの絶対におかしい、との表明なんですね。そ

こで、次のように展開されています。

「仏法の師弟観は、根本は師弟不二であり、仏法の道を共に研鑽する同志であり、友達の間柄であります。これが、最も民主的な師弟の関係であり、本来の師弟観なのであります。これから大学においても、この仏法の師弟不二の教育観に基づいた、新しい教授と学生との関係性が樹立されなければいけなくなってくると思うのであります。したがって、学内の運営に関しても、学生参加の原則を実現し、理想的な学園共同体にしていきたい」。

これが、先生の大学建設の大きな根幹になります。創価大学では、月に1回、理事長・学長を中心に、理事会と教授会と学生自治会との間で、「全学協議会」という会議を持っているんですね。これが、まさに先生の理想実現の具体的な姿になっています。

その他、ここには重要なことが書いてあるんですが、もともと大学と言うのは、いったいいかなるものであるのか。新しい大学というのはどういうことなのか。この点を池田先生は世界宗教と比較しながら、最後の部分で主張されます。このことは、今まであまり説明されたことがない、触れられたことがない部分だと思われますので、今日はそこを、結論的なことになってしまうのですが、紹介したいと思います。

「今日（これは昭和44年当時という意味です）の大学問題、スチューデント・パワーの意味するところは、しょせん、既成の価値観、既存の思想・理念の崩壊であり、新しき価値観、新しき思想・理念を求める時代の流れであります」

そこで、それぞれその既成の価値観とか思想理念とはどういうものだったかを述べ、そこで三大宗教と言われる、キリスト教、イスラム教、仏教の実体をみておきたい、という論点が展開されていきます。

先生がこの世界の三大宗教をどのように見ているのか。世界三大宗教の過去を非常に的確につかみとられ、非常に分かりやすくまとめて下さっています。ただ、この視点はあくまでも昭和44（1969）年当時のことであって、その後の状況によって、先生のお考えがもっと深化されている可能性があります、この段階でのご意見としてみておきたいと思います。ひとつはキリスト教ですが、

「私は、アンチキリストでは、決してありません。キリスト教が過去、人類の歴史に精神的に寄与した面があることも、十分に認めております。だが、歴史の示す事実を無視することはできない。一面のみに目を奪われるのではなく、全体を正しく見なければならないと思う」ということを踏まえたくて、次のように述べています。

「無知の原住民に、ヨーロッパ人が神に選ばれた優秀民族であることを教え、劣等民族である原住民は、ヨーロッパ人に従属することが、自然の摂理であることを教えた」

つまり、キリスト教を中心として繰り広げられてきた歴史と言うのは、結局、植民地主義であり、原住民を思うがままに搾取することである。そのためにこのキリスト教を使ったのではないか、というのが先生の見方なんですね。だから、宗教をアヘンとする考え方も、こうしたところから出ているのではないかと指摘しています。そして、当時、1960年代アメリカがベトナム戦争をしているときに、いわゆる「ヒッピー」が出てきますが、

「欧米の青年のあいだに広がっているヒッピー化の波も、彼らがよりどころにしているものが、ヨガや禅であることから知られるように、欧米社会の伝統であるキリスト教に対する反抗精神のあらわれであるということもできると思う」

無抵抗の原住民にたいして、自分たちは神に選ばれた人間だ、と自分たちで言って、搾取してもいいんだ。こうした考え方では通用しないでしょう、と指摘しているんですね。これは非常に重要なものの見方であろうかと思います。

これに対して、イスラム教の場合です。先生はイスラム教についても言及されておりまして「中近東、東南アジアに、なお数億の信徒を有しているとはいえずで近代文明の時代の潮流からは、取り残された過去の存在となっております」

「他宗に対し、比較的、寛大であったという説もありますが、かつて流布していった当時の様相を振り返ってみれば、全体としては右手にコーラン、左手に剣といわれるように、破壊と殺戮を繰り返しております。また、一日に五度も行う礼拝の儀式、断食、その他厳しい戒律等、およそ、イスラム教は近代生活には全くマッチしないといわざるをえない」

こういう風にイスラム教のことを述べられています。近代的な文明にマッチしないイスラム教がその後、今の地球上で、どういう形で何をしているのかということについては、また考えなければならぬ。私達はそういうことは判断しなければいけないと思いますが、1960年代の先生はこういう形で見ておられた。

それから次は仏教です。釈迦仏法の場合はどうか。

「過去の歴史を振り返ってみると、確かに釈迦仏法はインドでは阿育大王の時代の文化、カニシカ王時代のガンダーラ文化を栄えさせ、中国では天台大師の法華経述門の法体の広布による唐の大文化、日本では聖徳太子の仏教興隆による飛鳥、そして天平の文化、伝教大師の法華経述門の戒壇建立による、平安朝文化の興隆等をもたらし、幾多の輝かしい歴史を刻んでおります」

こういう点を評価して、

「だが、今日、すでに釈迦仏法は、ことごとく形骸化し、葬式と法事のための宗教と化してしまっている」

というように結論づけています。

「結局、釈迦仏法は僧侶仏法であり、貴族仏教であったといわざるをえない」

この一文は何度も言うようですが1960年代のものです。このように釈迦仏法のことを解説している。

「この釈迦仏法に対し、日蓮大聖人の仏法は民衆の仏教であります」

「私は日蓮大聖人の大仏法こそ、階級も、そして職業も、民族も越えた真実の世界宗教であり、世界全人類に流布すべき宿命をもった大宗教であると、一生涯訴え続けていきたいのであります。この仏法の根底精神は慈悲であります。慈悲とは、すなわち生命の尊厳であり、一切を生かしていくことにほかならない」

こうおっしゃってます。それが、最終的には、先ほど勉強しました3つのモットー、特に最後の

平和の要塞たれと、第三文明の建設、すなわち大文化の建設ですね。これに繋がっていきます。これは、根底に民衆の仏教である日蓮大聖人の仏法があるからなんだ、という先生の結論なんです。ここがひとつの大きなポイントで、創価大学の設立というのは人類の平和のため、人類の幸福のため。その根底には宗教がなくしてはありえないんだという先生の大確信。実はそれを一生涯訴えてきたんだ。創価大学もそのひとつなんだ、ということなんです。

（２）現在の創価大学とこれから目指すもの

私立大学が今この日本の現状の中で生き抜いていくためには、建学の精神なり、創立者の精神なりをいただいて、特色ある大学として、自分たちがいかに特色があるのかということを主張しなければならない、訴えなければならない、そういう時代に入ってきています。今まで創価大学はそういうことはあまり表面に出してこなかったんですが、これからは、創立者は池田先生であり、その最も根底にある思想というのは仏法の思想であるということを、逆に言えば声を大にして訴えていかなければならない、と私自身は思い始めています。ただ、授業の中で、宗教教育をやるのかやらないのか。これには問題があります。例えば、青山学院という大学はキリスト教の大学です。ここでは必ず朝、ミサの授業があるのです。国学院という大学があります。この大学は国家神道を基本にした宗教の大学ですから、一年生の必修科目に、国家神道の歴史を学ぶ、というものがあります。では、創価大学はどうか。それを必修化するのかどうか。こういう問題が私たちに関わっています。必修とするかどうかは別として、やっぱり勉強していくべき点はあるだろうと、だんだん私たちも気付きはじめました。自学史、すなわち自分の大学の歴史を学びたい、自分の大学の勉強をする。これはやっていいのではないかと思います。そのためには何が必要なのかというと、やっぱり教材が必要ですね。先生がこれまで書かれてきた色々なもの。これを抽出した形で一冊の本にまとめるとかですね、授業中に色んな資料を持ってきて、先生の大学に対する思いも伝えていくこと。そうしたことは、これから絶対に必要不可欠なんだろうなと思っています。

本年、創価教育研究所では、その教材作りをやってきました。本年度の後半からは一年生を対象に、その教材を配って、先生の思いを学ぼう。そういう流れを作っていこうと思っています。例えば、小説『新・人間革命』の中に書かれている「創価大学」の章とか、先生がコロンビア大学で講演をされた大学生に対する思いとか、そういうものをひとつの本にまとめてみました。これを中心に新しい創価大学の時代を作るためにそれを使って授業でも取り組んでいきたいなと思っています。

そのなかで最も重要なこと、それは、創価大学は何を目指しているのかという話ですね。何を目指してやっているのかというと、まさに建学の精神を目指してやっていますが、具体的なものが要ですね。その一つが平成20年（2008）度開設する教職大学院です。これは、小学校教員を対象に、10年以上の経験のある先生方のリメイクというのですかね、それを手伝う。それから、きちとした力をつけた教員を養うための専門職大学院。いま、校舎も作り始めてます。あと、栄光門のところに女子寮ができます。キャンパスから直結なんです。女子寮を作るとい

うことで建設計画が進んでいます。名前を決めようと色々悩んでいる。あそこ、交通量が多いでしょう。女子のかわいらしい名前をつけると変なやつが出ると困る。でもまさか男っぽい名前をつけるのもおかしいよね、とのことで加賀学生部長を中心に皆で悩んでいます。まもなく決まると思います（その後「創春寮」と決まりました）。それから、平成20年度には、今、工事が進められています、キャンパス側から大きなクレーンが見えるところに新総合体育館が完成します。これは平成21（2009）年の3月、つまり20年度の最後に出来上がってきます。なかなか大きな体育館です。室内にはアリーナがあって、上にスタンドがあって、そのスタンドがある後側に、後側というか2階にぐるっとアリーナを取り囲むような廊下を作りました。廊下が広いんですね。なんで広いのか。雨の日にそこでランニングができるように。あと、創価大学には弓道部があるんですが、弓道部は太陽の丘のむこう側の非常に寂しいところでやっていたんです。矢がどっちに飛んでいくかわからないからっていうのもあるんですが、本当に寂しいところでやっていたんです。冬は寒くて、弓道部の連中が焚き火をするんです。またそれが危ない。そのままほっとらかしにして帰ったら山火事になりますから。それで弓道部をなんとかしなくてはならないとのことで、弓道場を体育館の中に作った。

そのほかにも、「創大門」っていう門をつくろうと。これは今、池田講堂の向こう側、ちょうど北側になるんですがね、裏手に新しい道ができます。ちょうど今、金剛堂っていう仏壇屋さんができましたが、あの道が伸びるんです。そこの道が伸びると、大学の敷地をかすめるんですね。少し通るんですね。そこに門を作ろうと。これは池田先生のご提案です。それが創大門という門になるんですね。創大門が21年の3月にできてくるんです。来年度、再来年の春です。その創大門からずーと校舎に入ってくる道を先生は「創大シルクロード」という名前をつけてくださいまして、これは街路樹としてイチヨウの木、その脇に桜の木を植えようと。春は桜が咲くでしょう。ピンク色でしょ。秋はイチヨウの木で黄色、黄金色でしょう。綺麗じゃないですか。シルクロードって先生に命名していただきました。そのシルクロードができてから、今の中央体育館の解体工事にかかるんです。新しい体育館ができたらいらないでしょう。で、それを撤去してから、今度は新総合教育棟をつくろうじゃないかと。これは新しい建築計画。これできたらまたガラッと変わります。

こういう形で建設計画が進んでいます。新総合教育棟になにか新しいものをいれようとみんなで相談しているんですが、例えば、学生さんが学生証をもっているでしょう。学生さんの出席はいま出欠カードを配っているんですよ。それはマークシートの形式です。教員の方もこの形式になってから、だいぶ違うんです、出席管理が。でもね、新しい総合教育棟では学生証をICカードにして、教室を通るときに器械に通せば、出席がとれてしまう。これいいんじゃないのっていう話になって、僕らも賛成しているんです。教壇のところでスイッチをいれれば、出席が取れるシステム。よく考えてください。スイッチを入れないと取れないですね。スイッチを入れるっていうことはどういうことかという、教師が何時何分に教室に入ったかが、もろにわかってしまうんです（笑い）。ちょっと五分遅れたら、あいつ5分遅れた。遅刻したとわかるわけです。私達もICで管理されるということですね（大爆笑）。

本年度の後半の記念行事も目白押しです。

まず9月8日、戸田先生が原水爆禁止宣言をされてから50周年。その記念のシンポジウムというのが創価大学で開かれます。S201が会場です。これには、元国連事務次官の明石康さんに来ていただき、基調講演をしてもらいます。戸田先生の原水爆禁止宣言50周年、建学の精神にある「人類の平和を守るフォートレス」からこれを考えると、非常に大事です。

9月、北京大学で「池田大作詩文朗読会」が開かれます。池田先生が書かれた詩。これを中国の人が、中国語で朗読する会です。9月22日北京大学の百周年記念堂の中で行われます。

去年の夏季講座でも、ちょっとみなさんにご報告させていただきましたが、去年の10月に華中師範大学で開催された「池田大作思想国際学術シンポジウム」へ行ってきました。本当に中国の先生方が真剣に池田先生の思想を学んでいるんですね。さらに、そこでは先生が書かれた文章だけでなく、詩、それから写真を見て解説している人がある。先生が撮られた写真はこうだ、というように。写真のキャプションがありますよね。それが先生の思想性を表している、といった研究発表などもありました。それは女性の研究者だったんですが、ものすごくいい発表でしたね。みんなそういう勉強を始めているんですね。その意味で、創価大学の創価教育研究所というのが海外の様々な池田研究機関とのつながりというのを、これからさらにさらに深めていかなければいけない。そういう実感を持っています。

「池田大作詩文朗読会」に続いて、10月に、今ご報告したシンポジウムの2007年度のものが、今度は湖南師範大学で開催される予定です。これにまた私も参加させていただくことになっています。そこで、さらに今度は新しい事が展開されるんじゃないかなと思っています。特に中国とのつながりは先生のおかげで、パイプが非常に太いものがありまして、これは決して忘れてはいけない、大事にしていかなければいけないパイプです。今後ますます、中国の先生方と共に、池田先生の思想を学んでいきたいと思います。そして、来年にはいきますと北京大学で、池田先生80歳祝賀会が举行されるそうです。先生の80歳のお誕生日を、いまや諸外国が祝うようになってきています。

数年前から比べると、全然環境が違ってきてますね。その意味から創立者のことを、もっともっと研究しなければなりません。はじめにも、問題意識として申し上げましたが、創価大学は何故作られたのだろうか。それは、まさに牧口先生、戸田先生、池田先生と受け継がれてきた創価教育の実現なわけでありますが、創価教育の実現というのはいったい何なのか。これは、1人の人間が自分の持っている力を思う存分發揮して、新たな価値を創造していく、というところに全てのポイントがあるわけで、その新たな価値の創造というのが、実は平和に結びついていく、ということになります。まさに、その平和に結びついていく価値の創造というのを私どもは追及しなければならぬし、創価大学のキャンパスからそういう学生を輩出しなければいけないと思っています。

最近、特に先生も大学に力を入れてくださっていて、今年卒業した学生さんが池田先生が創価大学のキャンパスに来られた日数を数えてくれたそうです。キャンパスに何日来られたのか。この池田講堂で授与式がありますね。名誉博士号の授与式とか、そういうのがあって、その授与式

の回数や、あるいは色々な大きな行事、それ以外にも先生はキャンパスを車でまわられるんですね。そこで出会った学生達を激励してくださるんですね。その日数は、4年間でおよそ400日を数えました。年に100日です。ということは、およそ3日に1回ということになります。キャンパスを回わり、出会った学生達の手を握って、「手が冷たいね。大丈夫」と言いながら、「お父さん、お母さんによろしくね」と。最近、学生に出会えると必ず、「お父さん、お母さんによろしくね」とおっしゃっているんですね。それはなぜかという、今、こういう現代の状況の中にあって、親孝行なんていうと、人が小ばかにする。なにか、きちっとやることが、なんだかおかしいようなことをいう。でも違う。民衆の平和とそれから民衆の幸福を目指すのであれば、親に対する感謝のできない人が、平和とか幸福とかを語れるはずはない。「私は本当に自分の親を大事にする学生をつくりたい」と、ずっとおっしゃっています。それが本筋ですね。自分がここにいられるのも親のお陰なんだから。それを先生は学生たちに会う度、確認されています。

最近のエピソードを一つ紹介したいと思います。僕の研究室の学生がキャンパスを歩いていたんです。どうも車が止まっている。先生の車かな、誰かの車かな、と思って。どうも先生の車らしい、と思って、横を通ろうとして、チラッと中を覗いたんです。そしたら、窓がスーと開いて、先生がいらっしゃった。その人は、予想はしていたんですけど、予想通りすぎて、頭が真っ白になったんですね。先生の顔をみて、何を言ったのか。普通、先生にお会いしたら、例えば、「いつもありがとうございます」とか、「先生、こんにちは」と言えいいでしょう。その学生は何ていったのか。「どうも！」って言ったんです（笑い）。そうしたら池田先生はその学生に向かって、どう反応されたのか。にこっと笑って、「どうも！」と応えられたっていうんですね（大笑い）。その学生が研究室へ来て、「今日、先生にお会いしたんですけど、『どうも！』しかいえなくて。ものすごく落ち込んでいます」というんですね。仕方がないので、僕が「お詫びの手紙でも書くしかないね」とアドバイスしました。そうしたら次の日、またやって来まして、「昨日、早速池田先生にお詫びの手紙を書きました」というんです。どのような内容で書いたのかと聞くと「池田先生にお会いした際に、『どうも！』としか言えなくて、どうもすいませんでした」というんですね（大爆笑）。「君はどうも、どうも、だね」と言ったんですけど（笑い）。その出会いが、彼の大きな歴史になっています。そういう出会いがいたるところであるんですね。そういう事を考えましても、本当に先生の思いとか、その思いは戸田先生、牧口先生の思いですし、多くの方々がこの創価大学の設立のために色々な形でお手伝いをいただいた、また応援をしてくださった。そういう方の思いが詰まったキャンパスですから。そのキャンパスの思いを、私たちは学生の皆さんと共に常に忘れず、身に刻みつけながら、先生の理想、あるいは、皆さんと共に、多くの民衆の幸福と平和という人類の希望を果たしていく人材を輩出していきたいと思います。まだまだ創価大学は発展していくと思います。様々な形でこれからもご理解とご協力を賜ることが多々あると思いますが、何卒よろしくお願い致します。

以上で、私の講義を終わらせていただきます。大変にありがとうございました。

創価大学・創価学園設立関係年表

年	西暦	月	日	事象
昭和39	1964	6	30	第7回創価学会学生部総会にて、創価大学設置の発表
昭和40	1965	7	30	文京公会堂における教育部第4回幹部総会で、創価中学校・高等学校の設立、および創価大学設立委員会の設置発表
昭和40	1965	11	8	創価大学設立審議会発足
昭和40	1965	11	26	第1回創価大学設立審議会開催（創価高等学校を大学に先がけて建設する計画発表）
昭和41	1966	4		創価高校建設委員会発足
昭和41	1966	8	2	創価高校完成予想図発表
昭和41	1966	9	23	創立者が建設用地を視察
昭和41	1966	11	18	創価高校起工式
昭和42	1967	6	19	学校法人創価学園の設立および創価中学校、高等学校の設置が東京都より認可される
昭和42	1967	12		創価高校・中学校初年度の教諭24名が発表される
昭和43	1968	1	29	創価高校・中学校校舎落成式
昭和43	1968	3	9	設立審議会代表者会議で1971年開学の方針が決定
昭和43	1968	3	16	創価高校・中学校開校祝賀式
昭和43	1968	4	8	創価高校・中学校第1回入学式
昭和43	1968	11	3	大学設立準備委員会発足
昭和43	1968	11	28	創立者が建設用地を視察
昭和44	1969	4	2	創価大学起工式
昭和44	1969	10	7	創価大学定礎式
昭和45	1970	9	30	「学校法人創価大学」の設立を申請
昭和46	1971	1	5	創価大学入学試験要項が発表される
昭和46	1971	1	25	創価大学の設立が正式に認可される
昭和46	1971	2	11	創価大学竣工式
昭和46	1971	3	16	創価大学落成開学記念祝賀会
昭和46	1971	4	2	開学式
昭和46	1971	4	10	創価大学第1回入学式